# 仮名手本忠臣蔵（かなでほんちゅうしんぐら）

〔解　説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのう）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

〔あらすじ〕

《大　序》

〔鶴ヶ岡兜改めの段〕暦応元年（一三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利将軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭之助は、兜を宝蔵に納めに行く。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

# 大序　鶴ヶ岡兜改めの段

嘉肴(かこう)ありといへども食せざればその味(あじわい)を知らずとは。国治まつてよき武士の忠も武勇も隠るゝに、たとへば星の昼見えず夜は乱れて現はるゝ、ためしをこゝに仮名書の太平の代の政。頃は暦応元年二月下旬。足利将軍尊氏公。新田義貞を討ち亡し、京都に御所を構へ、徳風四方にあまねく、万民草の如くにて靡き従ふ御威勢。国に羽をのす鶴が岡八幡宮御造営成就し、御代参として御舎弟足利左兵衛督直義(さひょうえのかみただよし)公鎌倉に下着なりければ、在鎌倉の執事高武蔵守師直(こうのむさしのかみもろのお)御膝元に人を見下す権柄(けんぺい)眼(まなこ)。御馳走の役人は桃井播磨守が弟、若狭助安近。伯州の城主塩冶判官高定(えんやはんがんたかさだ)。馬場先に幕打廻し、威儀を正して相詰むる。直義仰せ出ださるゝは

「いかに師直。この唐櫃に入れおきしは、兄尊氏に亡されし新田義貞、後醍醐の天皇より賜つて着せし兜。敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流、着棄の兜といひながらそのまゝにもうちおかれず。当社の御蔵に納める条、その心得あるべしとの厳命なり」

とのたまへば　武蔵守承り

「これは思ひもよらざる御事。新田が清和の末なりとて、着せし兜を尊敬(そんきょう)せば、御旗下の大小名清和源氏はいくらもある。奉納の儀然るべからず候」

と遠慮なく言上す。

「イヤさやうにては候まじ。この若狭助が存ずるは、これはまつたく尊氏公の御計略。新田に徒党の討ちもらされ、御仁徳を感心し、攻めずして降参さする御方便(てだて)と存じ奉れば、無用との御評議卒爾なり」

といはせも果てず

「ヤア師直に向つて卒爾とは出過ぎたり。義貞討死し

たる時は大わらは。死骸のそばに落ち散つたる兜の数は四十七。どれがどうとも見知らぬ兜。さうであらうと思ふのを奉納したその後で、さうでなければ大きな恥。なま若輩な形(なり)をしてお尋ねもなき評議すつこんでおるやれ」

と御前よきまゝ出るまゝに杭とも思はぬ詞の大槌。打ち込まれてせき立つ色目。塩冶引取つて

「コハごもつともなる御評議ながら、桃井殿の申さるるは治まる代の軍法。これ以て捨てられず、双方まつたき直義公の御賢慮仰ぎ奉る」

と申し上ぐれば、御機嫌あり。

「ホヽさいはんと思ひし故、所存あつて塩冶が婦妻を召し連れよと言付けし。これへ招け」

とありければ、『はつ』と答への程もなく、馬場の白砂、素足にて裾で庭掃く裲襠(うちかけ)は、神の御前の玉箒。玉も欺く薄化粧。塩谷が妻の顔世御前、はるか下つて畏る。女好きの師直、そのまま声かけ

「塩冶殿の御内室顔世殿。最前よりさぞ待遠。御大儀〳〵。御前のお召し。近う〳〵」

と取持ち顔。直義御覧じ

「召出すこと外ならず。往時(いんじ)元弘の乱れに後醍醐帝都にて召されし兜を、義貞に賜つたれば、最期の時に着つらんこと疑ひはなけれども、その兜を誰れあつて見知る人ほかになし。そのころは塩冶が妻、十二の内侍のその内にて、兵庫司の女官なりと聞き及ぶ。さぞ見知りあらんず。覚えあらば兜の本阿弥、目利き〳〵」

と女には、厳命さへも和らかに、お受け申すもまたなよやか。

「冥加にあまる君の仰せ。それこそは私が明け暮れ手馴れし御着の兜。義貞殿拝領にて、蘭奢待(らんじゃたい)といふ名香を

添へて賜はる。御取次はすなわち顔世。そのときの勅答には、人は一代名は末代、すは討死せん時、その蘭奢待を思ふまま、内兜にたきしめ着るならば、鬢の髪に香を留めて、名香かほる首取りしといふ者あらば、義貞が最期と思召されよとの詞はよもや違ふまじ」

と申し上げたるロもとに、下心ある師直は、小鼻いからし聞きゐたる。直義詳しく聞し召し

「ホヽウ 審（つまびら）かなる顔世が返答。さあらんと思ひし故、落ち散つたる兜四十七、この唐櫃に入れ置いたり。見分けせよ」

と御諚意の、下侍、屈むる腰の海老錠を、あくる間遅しと取り出すを、おめず臆せず立寄つて、見れば所も名にし負ふ、鎌倉山の星兜。とつぱい頭、獅子頭、さて指物は家々の流儀〳〵によるぞかし。あるひは直平筋兜、錣のなきは弓のため、その主々の好みとて、数々多きその中にも、五枚兜の竜頭これぞと言はぬその内に、ぱつと香りし名香は

「顔世が馴れし義貞の兜にてござ候」

とさし出せば、

「さやうならめ」

と一決し

「塩冶、桃井両人は、宝蔵に納むべし。こなたへ来たれ」

と御座を立ち、顔世にお暇給はりて段かづらを過ぎ給へば、塩冶、桃井両人も打連れ（てこそ入りにける。）

# いちのたにふたばぐんき
# 一谷嫩軍記

［解　説］宝暦元年（一七五一）十二月豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨児・並木正三らの合作で、「平家物語」・「源平盛衰記」から敦盛最期と忠度都落ちを中心に脚色したもの。熊谷が義経の指図により、我が子の小次郎を敦盛の身代りとして首を討つという封建社会の悲劇が聴く人の胸を打つ。

［あらすじ］一の谷の合戦で平家の大将敦盛は敵の平山を見失い、沖の味方の船へと馬を波間に乗り入れるが、源氏方の熊谷が勝負を挑んで呼び返す。熊谷は苦も無く敦盛を組み敷くが、わが子の小次郎と丁度同じ年恰好であるのを討ち兼ねて助けようとする。それを平山に見咎められた熊谷は進退極ってついに首を討つ。

# 組討の段

去る程に御船を始めて、一門皆々舟に浮かめば乗り後れじと、汀に打ち寄れば御座船も兵船も、遥かに延び給ふ。

無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、御座船に馳せ着いて、父経盛に身の上を告げ知らす事ありと、須磨の磯辺へ出でられしが、舟一艘もあらざれば、詮方波に駒を乗り入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。

かゝりける所に後ろより熊谷の次郎直実、

「ヲヽイヲヽイ」と声をかけ、

駒を早めて追っかけ来たり、

「ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大将軍と見奉る。正なうも敵に後ろを見せ給ふか引っ返して勝負あれ。かく申す某は、武蔵の国の住人熊谷の次郎直実見参せん返させ給へ」

と、扇を上げて指し招き、

「暫し暫し」

と呼ばはったり。

敵に声をかけられて何か猶予のあるべきぞ。敦盛駒を引っ返せば、

熊谷も進み寄り、

互ひに打物抜きかざし、朝日に輝く剣の稲妻かけ寄り、かけ寄せちゃうちゃうちゃう。蝶の羽がへし諸鐙、駒の足並みかっしかっし。かしこは須磨の浦風に、鎧の袖はひらひらひら。群れゐる千鳥村千鳥むらむらぱっと引く汐に、寄せては返り、返りては又打ちかくる虚々実々。勝負も果てしあらざれば、

「いそうれ組まん」

と敦盛は打物からりと投げ給へば、

「コハしをらし」

と熊谷も太刀投げ捨てて駒を寄せ、馬上ながらむずと組み、

「えい」

「えい」

「えい」

の声の内、互ひに鐙を踏みはづし、両馬が間(あい)にどうど落つ。

すはやと見る間(ま)に熊谷は敦盛を取って抑へ、

「かく御運の極る上は、御名を名乗り直実が高名誉れを顕し給へ。又今生に何事にても思ひ残す御事あらば、必ず達し参らせん。仰せ置かれ候へ」

と懇ろに申すにぞ、

敦盛御声爽やかに、

「ヲヽやさしき志、敵ながらあっぱれ勇士。かく情ある武士の手にかゝり死せん事生前(しょうぜん)の面目。戦場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、兼てなき身と知るゆゑに、思ひ置く事、更になし。さりながら忘れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞き給はゞ嘸御歎き思ひやる。せめて心を慰む為、討たれし跡にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし。我こそ参議経盛の末子(ばっし)、無官の太夫敦盛」

と、名乗り給ひしいたはしさ、

木石ならぬ熊谷も見る目涙にくれけるが、何思ひけん引き起こし鎧の塵を打ち払ひ打ち払ひ、

「この君一人助けしとて勝軍に負けもせまじ。折節外に人もなし、一先づこゝを落ち給へ。サ早う早う」

と言ひ捨てゝ、立ち別れんとする所に、

後ろの山より武者所数多(あまた)の軍兵、

「ヤアヤア熊谷、平家方の大将を組み敷きながら助くるは、二心に紛れなし。きゃつめ共に遁すな」

と声々に罵るにぞ、

熊谷は「はっ」とばかり、「いかゞはせん」と黙然たり。

敦盛卿しとやかに、

「とても遁れぬ平家の運命。こゝを助かり行先にて下司下郎の手にかゝり、死に恥を見せんより早く御身が手にかけて、人の疑ひはらされよ」

と、西に向かひて手を合はせ、御目を閉ぢて待ち給へば、

いたはしながら熊谷は御後ろに立ち廻り、『弥陀の利剣』と心に唱名、ふり上げは上げながら、玉の様なる御粧ひ。「情なや無慚や」と、胸も張り裂く気後れに、太刀ふり上げし手も弱り、思ひにかきくれ討ちかねて、歎きに時も移るにぞ、

「アヽ愚かや直実。悪人の友を捨て、善人の敵を招けとはこの事。早首討ってなき跡の回向を頼む。さもなくば、生害せん」

とすゝめられ、

「アヽ是非なし」

と突っ立ち上がり、

「順縁逆縁倶に菩提。未来は必ず一蓮託生」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

首は前にぞ落ちにけり。

母衣(ほろ)をほどいて敦盛の、御死骸を押し包み、総角(あげまき)取って引き結び、手綱をたぐり結ひ付ける、鞍の鞍(しおで)やしをしをと、弓手(ゆんで)に御首携へて、右に轡の哀れげに、檀特山(だんどくせん)のうき別れ、悉陀(しった)太子を送りたる、車慝童(しゃのく)子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに帰りけり。

つぼさかかんのんれいげんき

# 壺坂観音霊験記

〔解　説〕

福池桜痴（一説には伊東椿増）が作ったと言われる浄瑠璃に、二世豊澤団平の妻千賀が加筆してできた明治新作浄瑠璃の一つです。団平が作曲し明治十二年十月、大阪大江橋で六世豊竹島太夫が最初に語り、その後、作曲者自身が曲を改めて、明治二十年稲荷彦六座で三世大隅太夫と上演しました。翌二十一年には歌舞伎化もされ、以来、これを上演すれば必ず大入りになるといわれるほどの人気曲となりました。

盲目の座頭の沢市と、彼に献身的につくす妻、お里の夫婦愛の物語。「三つ違いの兄さんと…」という、お里のくどきは有名です。ちなみに壺阪寺もこの浄瑠璃の評判に伴い、辺鄙な場所にもかかわらず、遠方からの参詣人が集まるようになりました。

〔あらすじ〕

**沢市内の段**　座頭の沢市は、洗濯物や賃仕事をして生活を助ける妻のお里と、壺阪寺のほとり、土佐町に細々と暮らしていました。沢市は子どもの頃に疱瘡から盲目となり、そのひがみから、三年の間、毎夜七つ過ぎに家にいたことがないと、お里の行動を疑い続けていました。ところがお里は、沢市の目を治したい一念で、その昔、桓武天皇の眼病がここに立願して平癒したことから、眼病には霊験のあるという壺坂の観世

音に三年越しの祈願をしていたのでした。それを知った沢市は自分も参籠しようと、夫婦そろって寺に向かいます。

# 沢市内の段

夢が浮世か浮世が夢か、夢てふ里に、住みながら、住めば住むなる世の中によしあし曳きの大和路や、壺坂の片辺り土佐町に、沢市といふ座頭あり生れついたる正直の、琴の稽古や三味線の、糸より細き身代の、薄き煙の営みに、妻のお里は健やかに、夫の手助け賃仕事つづれさせてふ洗濯や、糊かひものを打盤の、音もかすかの暮らしなり。

〽鳥の声、鐘の音さへ身に泌みて、思ひ出すほど、涙が先へ落ちて流るゝ妹背の川を

「オヽこれは〳〵沢市様。けふはなんと思ふてやら、三味線出して、よい機嫌ぢやの、ホヽヽヽ」

「オヽお里か。そなたアノ、おれが三味線弾くをよい機嫌に見ゆるかや」

「アイナア」

「ハテナア、おりやそんな気ぢやないはいの。モウモウ気が詰つて〳〵いつそ死んでものけう」

「エヽ」

「イヤサアノ死んでしもうほど、気がふさいでならぬわいなう。コレお里。わしやそなたに、チト尋ねたいことがある。マヽここへおぢや〳〵。ハテまあここへおぢやいなう。ほかのことでもないが、いつぞは聞かう〳〵と思ふてゐたが、丁度幸ひ。光陰矢のごとしとやら、月日の経つはアヽはやいものな。ソレわが身とおれが、コウ一緒になつてからモウ三年。稚ない時より許嫁。互に心も知つてゐるにマなぜ、そのやうに隠しやるぞさつぱりと打明けて、云ふてたも」

とどこやら濁る詞のはし。お里はさらに合点いかず

不審ながらに

「コレ沢市様、そりやお前なにを云はしやんす。嫁入りしてから三歳の間、モほんに〳〵露ほども、隠し立てしたことはござんせぬが、それともになんぞまた、お気に入らぬことあらば、云ふて聞かして下さんせ。サそれが夫婦ぢやないかいな」

「ムヽそう云やればこつちも云はう」

「オヽ、なんなりとも云はしやんせ」

「オヽ云はいでか。コリヤお里。マよう聞けよ。われと夫婦になつて丸三年。毎晩七つから先、つひに一度もゐたことがない。ソリヤもうおれはこのような盲目。ことにえらい疱瘡で、モ見る影もない顔形。どうでわれの気に入らぬは無理ならねどほかに思ふ男があらば、さつぱりと打明けて、云ふてくれたらこのようになんの腹を立てうぞい。尤もわれとおれとは従兄妹同士。もつぱら人の噂にも、アノお里は美しい〳〵と、聞く度ごとにおれはもう、よう諦めてゐるほどに、悋気は決してせぬぞや。コレどうぞ明かして云ふてたも」

と、立派に云へど目に漏るゝ、涙呑込む盲目の、心のうちぞ切なけれ。聞くにお里は身も世もあられず、縋りついて

「エヽソリヤ胴欲な沢市様。いかに賤しい私ぢやとて、現在お前を振捨てゝ、ほかに男を持つやうな、そんな女子と思ふてか。ソリヤ聞こえませぬ聞こえませぬ〳〵はいな。モ父様や、母様に別れてから伯父様のお世話になり、お前と一緒に育てられ、三つ違ひの兄さんと、云ふて暮してゐるうちに、情けなやこなさんは、生れもつかぬ疱瘡で、眼かいの見えぬその上に、貧苦にせまれどなんのその、一旦殿御の

沢市様。たとへ火の中水の底、未来までも夫婦ぢやと、思ふばかりかコレ申しお前のお目をなおさんとこの壺坂の観音様へ、明けの七つの鐘を聞き、そつと抜け出でたゞ一人、山路いとはず三年越し。せつなる願ひに御利生のないとはいかなる報ひぞや。観音様も聞こえぬと、今も今とて恨んでゐた、わしの心も知らずして、ほかに男があるやうに、今のお前の一言が、私は腹が立つはいの」

と口説き立てたる貞節の涙の、色ぞ誠なる。初めて聞きし妻の誠。今更なんと沢市が、詫びの詞も涙声

「アヽコレ女房どの、なんにも云はぬ堪忍してたも。謝つた〳〵。謝つたはいなう。モウさうとは知らず、不具の癖に愚痴ばかり。コレ堪へてたもれ」

と、ばかりにて、手を合はしたる詫び涙。袖や袂を浸すらん

「アヽコレ連れ添ふ女房になんの詫び。お前の疑ひ晴れたれば、わたしや死んでも本望ぢや、わたしや死んでも本望ぢやわいな」

「イヤモウさう云ふてたもるほど、わが身の手前面目ないはいなう。ガそれほどまで信心してたもつても、おれがこの眼は治りはせぬはいの」

「エヽ、ソリヤマアなにを云はしやんすぞいな。この年月の憂き艱難。雨の夜、雪の夜霜の夜も、厭はぬ私が跣(はだし)参りも、みんなお前のためぢやぞえ」

「サアそれほどに祈誓をかけ、願ふてたもつた志。ありがたいとも、嬉しいとも、その貞節なそなたをば、この年月の廻り根性。ハテモウ観音様ぢやと云ふたとて、罰こそあたれなんのマア、この目が明いてたまるものか」

「エヽなんのいのふ。私の体はコレイナアコレ、お

前の体も同じこと。そんな愚痴を云はうより、ちやつと心を取直し、観音様へともどもに、お頼み申して下さんせ、お頼み申して下さんせ」

と、夫を思う貞心の心遣ひぞ哀れなり。沢市涙にくれながら

「オヽ過分なぞや女房ども。さうそなたが一心の、据つた上は御仏の、枯れたる木にも花が咲くとやら、見えぬこの目は枯れたる木。アヽどうぞ花がさかしたいな。と云ふたところが、罪の深いこの身の上。せめて未来を」

「エヽ」

「イヤサアノ女房ども。手を引いてたもいざ〳〵」

と、云ふに嬉しく女房が、身拵へさへそこ〳〵に、労はり渡す細杖の、細き心も細からぬ、誓ひは深き壷坂の御寺を、さして

※無断転載を禁じます